

行 発 房 書 百 第

365

特 244
954

ソ 聯 は 今 何 を 劃 策 し て ゐ る か
ソ 聯 は 今 何 を 劃 策 し て ゐ る か
ソ 聯 は 今 何 を 劃 策 し て ゐ る か

一 島 康 夫 著

10 セン

2



* 0011143000 *

0011143-000

特 244-954

ソ 聯 は 今 何 を 劃 策 し て ゐ る か

三 島 康 夫 ・ 著

第 百 書 房

昭 和 1 2

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

行 発 房 書 百 第

特 244

8
3

365

954

一 島 康 夫 著

ソ 聯 は 今 ！
何 を 劃 策 し て お る か
白 ソ 果 し て 戦 ぶ か

10 セン

37
4

特244
954

目次

- 一、ソ聯の積極的對支援助……………(三)
- 二、ソ聯武力の目標は日本……………(三)
- 三、支那事變に對するソ聯の劃策……………(七)
- 四、ソ聯は果して日本と戰ふか……………(七)
- 五、北支 上海戰に動くソ聯軍事……………(三)
- 六、ソ聯の對日觀察の誤算……………(四)
- 七、ソ支不可侵條約の裏にあるもの……………(六)
- 八、ソ聯の對支援助は日ソ戰の小手調べ……………(六)
- 九、ソ聯が日本と戰ふ時……………(三)



ソ聯は今何を劃策してゐるか

三 島 康 夫

一、ソ聯の積極的對支援助

にくらしい奴が、つまづくのは一寸いゝ氣持だが、そいつが威勢隆々、仲好しを取つて押へてゐるのを見るのは辛いだらう。沈んや、自分に唆かした覺えがあつて見れば、實は安閑とはして居れぬ、ソ聯だ。

盟邦(？)支那が、北支でまんまと事を起してくれたまでは上出来であつたが、幾倍か

ソ聯は今何を劃策してゐるか

の大兵力を擁しながら敗退、一週間で平津間を平定され、八萬の二十九軍は約三萬に激減してしまつた。上海でも陸戦隊の寡兵をよい事に、一舉に上海を奪取する計畫をたて、よもや飛ぶまいと思はれた空軍を動かしたところが、こゝも大體一週間で目安がついてしまつた。空軍根據地は二、三を除いて大方爆滅され、飛行機も單葉低翼流線型の元祖ノースロップ輕爆機を始め、マアチン、ボーイング等の新銳第一線機ざつと三百ばかりの中、おそらく三分の一は喪失したらう。さうして、上海へは我が陸軍が上陸して戰略要點を占守し、来るべき大掃蕩戰の展開が豫想されるに至り、北支では、後續兵團の充實と共に早くも一大作戦が開始された。その結果がどうなるかは、も早問はずして明かだ。

ソ聯はたしかに氣が氣でない。しからば彼はどうしようといふのか。第一に、彼は支那の陰にかくれてあと押しをしてゐる。支那の武力補強だ。フランスのレビュブリック紙はチエラール氏署名入りで、ソ聯は七月末までに飛行機三八二、戰車二〇〇、大砲四三〇門重機一、五〇〇を支那へ供給したと報じてゐる。現在までのところ、この數字は少し多過ぎてちよつと首肯できないが、しかし新疆を通して、或は浦鹽から飛行機その他の兵器が

ぞくぞく輸送されつゝある事實は疑ひない。或は以上の數字は、契約數字でそれは遂次陸海兩路から輸送されつゝあるのかも知れぬ。同紙はこれと同時に飛行機のパイロットと技術員が、共產主義の宣傳員と一緒に派遣せられたと云つてゐる。ブリュッヘルが外蒙へ入つたとか、兵二萬が送られたとかいふのは頭から否定はできないばかりか、大いに可能性はあるが、まだ確報ではない。

しかし若干のパイロットと砲兵士官二百人が支那へ向つたといふのは、かなり信すべき情報であるやうだ。なぜなら、空軍は十四日から二十日までの一週間の実績が語るやうに洵にあつけないものであり、砲兵はまたその射撃技術が餘り上手でなく、この二つは明かに支那軍の弱點であるから、これを極力補強しようとするのは、もつともな次第だからである。飛行機とそのパイロット、戰車とその指揮官、大砲及び機銃とその射手——これは既にスペイン戰で、その實證を見てゐるところだ。北支から西北支那へかけて、この同じ事實が現はれないと、誰が保證し得るだらう。しかもスペインと違つて支那に對しては兵員の大部隊すらも、増援することが可能である。

ソ聯は今何を劃策してゐるか

第二は對外宣傳だ。事變以來ソ聯紙は、

(イ) 事變は侵略的野心から日本が起したのだ。

(ロ) 豊富な北支の天然資源を占有するのが目的だ。

(ハ) 次でソ聯領域に侵入せんとするものだ。

といふことを、連日手を代へ品を換へて書き立てたばかりでなく英、米、佛、獨等の諸國へもラヂオで放送してゐる。この事實はソ聯ばかりでなく、如上の諸列強へも大いにデマつて、滿洲事變當時のやうな孤立状態に日本を陥れようとする逆宣傳である。我國がこの尾について「ソ聯邦とも密接な連絡を保つてゐる」と外相の名に於て放送したのは、モスクワをして吾意を得たりと思はせたことであらう。

さればソ聯は、米國のアジア艦隊の浦鹽入港を、歡迎これ努めて、鳴物入りで報道し、ソ米無着陸飛行でさまざまの仕草をして見せたり、米ソ通商條約を締結したり、米國へ飛行機や軍艦の註文を發したり、ムルマンスク軍港に、米國の技術的援助を求めたり、得意の媚態外交を縦横に活躍させてゐる。

しかし、相互援助條約を締結してゐるフランスから、北支を引つ掻き廻して、重大なる事端を發生せしめるやうなら援助條約は打ち切りだ、といはれたり(右翼系マタン紙)、對支援助を素つ破抜かれたり(左翼系人民戰線系新聞)してゐるのは、その宣傳効果が擧つてゐるとは言はれない。

第三は日本に對するアヂだ。ソ聯の新聞紙やラヂオは、上記の宣傳と同時に、一方では支那が大して敗けてないこと、また假りに負けて多少の土地や、都會を奪取されても大した事ではなく、支那の長期抵抗戦は、やがて日本をへこたれさせるであらうといふことを他方では今度の事變が、日本では不人氣であること、たちまち資源が枯渴するであらうこと、その他さまざまのデマを飛ばしてゐる。

これは、これまで支那の統一が進捗し、共產派と國民黨との合作が成功し、ソ聯の對支援助が大いに効果を擧げて、精神的にも物質的にも、支那軍が格段に強化されたことを報導して、國內赤軍を鼓舞し、併せて支那をアジつて來た手前の負け惜しみばかりではなく、コミンテルンの活動と相俟つて滿洲、朝鮮、臺灣は勿論のこと、日本本土さへも攪亂しよ

ソ聯は今何を劃策してゐるか

うといふ魂膽からのことである。

敵の背後、または腹中に我が味方である第三軍を作らうとするソ聯得意の戦術である。彼はすでに、支那に中國共產黨を作り、中國紅軍を拵へ上げて、支那をこゝまで引摺つて來たのだ。彼はこれを滿洲で、朝鮮で、さうして本土でも成功させようといふのだ。それは獨り軍隊ばかりではない、あらゆる形をとつてやり遂げようとする、國民の心を蝕まうとするであらう。

二、ソ聯武力の目標は日本

端的に言へば、ソ聯は日本の武力を壓伏したいのだ。第二次世界大戰に備へて、武力を充實すべしとする建前から、一九二八年以來銳意武力を強化すべく、二次にわたる五ヶ年計畫を立案遂行して來たが、その途次、滿洲事變に遭遇した彼は、爾來重點を日本に集中した。さうして一九三五年頃には、自分免許で對日優越を公稱するやうになつた。ところ

が、漸く自信が得られようとするときに、獨逸の再軍備宣言に會して、自信は再び動搖した。——といふやうに強大な或る一國を、手もなく押へ切れるほどな大軍備などといふものは、さう容易に出来るものではない。

盟邦を求める心の起るのは當然である。英、米二國乃至そのどちらかでも最上の盟邦だが、どちらも無意味な對日戦には、滅多に引ずり込まれない。

支那は、この場合三つの利點を持つてゐる。

第一支那を盟に使へば、英・米が動かぬとも限らないことは滿洲、上海兩事變で實驗済みだ。うまくゆけば英・米を引きだすことが出来る。

第二支那を共同戦線へ引込めば、日本軍の何割かを牽制することが出来るし、目前日本の戦力を幾分か減耗させることが出来る。

第三若し支那を完全にソ聯化することが出来れば、レーニンの所謂「世界赤化は東方に於て律す」で、赤色武力の絶大な補給基地を獲得する譯だ。

しかも、支那は共產主義を反帝國主義のラインに沿つて宣傳するのに、もつてこいの半

ソ聯は今何を劃策してゐるか

植民地國であつた。一九三〇年以來反帝國主義の宣傳をつゞけ、上海事變後の一九三二年からは、反帝運動を日本に集中して抗日戦を煽動して來た。中國共產黨は對日宣戦を宣言し、一九三四年には對日作戦宣言を發表した。それによると、

(イ) 支那全民衆が武装すること。

(ロ) 日本以外の總ての敵と聯合すること。

等が主なる方略となつてゐた。中國共產黨の活動は、一切コミンテルンの指令に基いてゐた。さうして、今年二月の三中全會では、その時の作戦宣言に規定してあつた通りの條件で、南京政府と中國共產黨とが妥協した。しかもその他に對日戦略戰術を傳授したり、武器を供給したり、さらに赤軍の武力を大いに誇示して、對日決戦には當然ソ聯赤軍が全軍を擧げて支援するかの風を示した。

支那が――

(一) 對日長期戦々略と遊撃戰術で戦へば日本は敗れる。

(二) 日本には資源乏しく、これに反し支那は、人的資源及び物的資源豊富だから結局

日本は戦争が出来ない。

(三) ソ聯は勿論、英、米等の諸強國が必ず支那側に立つだらう。

と信じ、さらに支那自身の武力を多く青年層の間に過信させたのは、主としてソ聯の煽動と甚だあてにならぬ援助公約との結果であつた。英國は財政援助、道德的援助並びに在支英人記者達が支那を煽だて上げた事などに依つて、支那の對日開戦には、その責任を一部負はねばならぬが、元兇はソ聯であつた。

だから、支那軍が脆く敗亡するのは、ソ聯に取つて意外でもあり誤算でもあるが、同時にソ聯が敢然立つて支那を支援しないのは、これ亦支那に取つて意外であり、誤算でもあつた。

しかし、まだ問題は決つた譯ではない。ソ聯の對日アヂにせよ、支那支援にせよ、むしろ是からだ。これからの戦局推移の如何にあると思はなければならぬ。けだし、ソ聯の思惑は、時局がどう轉んだからといつて、ハタと止まつてしまふやうな生易しいものではない。彼は實に深謀遠大な策案を胸中深く藏してゐるのだ。

ソ聯は今何を劃策してゐるか

三、支那事變に對するソ聯の劃策

それは、大別して三つの意圖を持つてゐる。

第一は日本戦力の減耗を策することだ。

あらゆる角度からする支那支援も、世界への宣傳も、日本へのアヂも、悉くこれだ。あらゆる角度からする支那支援も、世界への宣傳も、日本へのアヂも、悉くこれだ。成程アハよくばこうした手段で日本打倒が成立するかも知れぬと思つてゐるだらう。しかし、それは萬が一の話で、それに多分の可能性を信するほどの短見ではないであらう。英國もソ聯を利用こそすれ、赤い笛に躍らされるほど老衰もしてゐない。著るしく感情的な米國も、赤い笛に躍らされて東亞が荒廢した後の、荒涼たる燒野原から何が芽生えて來るかぐらゐの見透しは持つてゐるだらう。赤塵に操られたんでは、資源再分配論が泣かうといふものだ。また支那軍にしてもさうだ。支那がこんなに手もなく負けようとは思はなかつたかも知れぬが、日本に勝つとは思つてゐないであらう。同時に二萬や三萬の赤軍が支

(12)

那に加勢したからといつて、日本に敗色が現はれるとも思つてゐないであらう。日本内部の對立乃至不統一、あるひはまた共產主義の勢力浸潤といふことに驚くべき過大な評價をしてゐるやうではあるが、だからといつて、對日アヂぐらゐで、日本がぐらつくとも思つては居ないであらう。

唯半年か一年か、或は二年か、ともあれ日本の緊張が弛んだ隙を狙つて一舉に大宣傳をやつて、その時こそはと思つてゐるかも知れぬが、今は差當り日本勢力の減耗を目當てにしてゐるのだ。兵員、器材、資源の消耗は勿論、もつと細かくもつと巧妙に、戦意を挫折し、戦時經濟の機能を鈍磨させるいろ／＼な手を使ふであらう。

そこで、その爲めに、宣傳は暫らく措いて、直接には支那をして長期戦を戦はしめ、日本をこれに引摺り込まうとするのであらう。杉山陸相が二十三日民政黨の代表に「彼の長期作戦には乗らぬ積りだ」と言つたのは、この種作戦を斷碎する決意を示したものである。

だが、ソ聯の長期戦々略の背後には、單に日本の戦力を消耗させようといつた消極的な意味ばかりでなく、彼が日本を誹謗した言葉に、そのまゝ鬨斗をつけて、返へさなければ

ソ聯は今何を劃策してゐるか

(13)

ならぬ大きな底意がある。

それは、長期戦々略の結果如何に依つて二つに分れる。

若し支那が成功すれば――

西北に利権を獲得しやうといふのだ。さきに引用したヂエラール氏論説の一説に「……ソ聯側はこの（武器、指導員供給の）代償として、支那とシベリア鐵道を連絡する鐵道の敷設權、その他北支に於ける各種特別權の獲得を要求するものである」とあるのがそれだ。これは一九二四年、ソ聯駐支大使が南京政府に提出した要求を見れば、即座に合點が行くその中には要旨左のごとき項目があつた。

一、支那西北及新疆地方の開發にはソ聯の資本及び技術を採用すること。

二、隴海鐵道及びトルキスタン鐵道等支那本土との連絡鐵道の建設にはソ聯の投資、合辦の權利を承認すること。

三、支那はソ聯に對し、新疆、伊犁及びその附近の開發を認めること。

その代償として、支那に武力的壓迫を加へず、中國共產黨に對しても物質的援助をせぬ

と約束したのであるが、通商條約が出来ただけでこの協定は成立しなかつた。さうして。

一九三〇年四月全長、一、四四五軒の戰略鐵道トルクシブ鐵道を敷設すると共に、新疆に對する活動を新にした。一九三一年十一月、ソ聯代表スラウツキーは、時の新疆省首席金樹仁と一條約を締結した。これより先、金はソ聯と連絡をとつて前首席、揚増新を暗殺した。次でソ聯は、回教徒馬仲英を使喚して叛亂を起させ、金に兵馬彈藥を供給して、馬を討たせて恩を賣つて置いた。次に金の評判が悪いので、盛世才を支援して叛亂を起させ、ソ聯の近代軍を押し出して盛に援助すると共に、武力的に實權を握つて了つた。一九三四年十月のことだ。そして、盛との間に秘密協定を結んで、完全にソ聯化して了つた。かくして、實際支配權を獲得したソ聯は、一九三六年一月一日盛との間に、更に新密約を締結したのだが、その中には、次のやうな項目がある。

一、新疆省の建設は一切ソ聯政府であるかほりに、ソ聯政府は新疆省の主權に對して他の干渉を許さない。

二、新疆政府が外征する場合には、ソ聯は全力を擧げて協助する。

ソ聯は今何を劃策してゐるか

三、新疆省が獨立するときは協助する。

四、新疆省の迪化から綏遠にいたる鐵道建設權はソ聯政府に讓與する、たゞし十五年後には無代償で新疆省に返還する。

おそらく、十五年後には新疆は人民共和國となつて、ソ聯邦の一員になることを積つてゐるのであらう。

新疆と支那との交通路は、一つは一番近い哈密、包頭間に一、六〇〇軒、迪化から張家口までが二、六六八軒であるが、その二は西安から蘭州を経て哈密、迪化に行くもので、これは一、八〇〇軒ばかりである。前者は自動車路があり、後者には新に自動車があるだけだ。しかるに、ソ聯トルクシブ鐵道と新疆との間は、塔城から一番近いところは二五六軒、遠いところで六四〇軒に過ぎない。おそらく今日ではもつと近く新疆省内へ鐵道が敷かれてゐるであらう。だから、ソ聯はこの有利な交通關係を利用して新疆を温めてしまつたので、支那側では新疆と本土とを結ぶ鐵道敷設をかねて計畫してゐたのである。その手近かなものをして、隴海線を西安から蘭州を経て哈密に連接しようといふのであつた。

ところが、ソ聯は甘肅、陝西へ共產軍が追はれて來たのを幸ひに、まづ西安經防の張學良軍を共產化してだきこみ、彼の手を以て南京政府を動かし、さうして隴海線をわが手で新疆へ引きのばさうとしたのである。支那大陸を横斷して太平洋へ、規模雄大なる計策である。ところで、前記佛紙の報じたところは、どこまで信すべきかは疑問であるが、張北（張家口の北方）乃至は包頭から烏得へ出て庫倫へ、或はもつと西方から外蒙を貫通してシベリア鐵道へ聯接しようとする意圖は、極めて有り得べきこととして諒解される。吾々はこの想像乃至假定として一笑に附し去ることは出來ない。一九二四年にはテンデものにならなかつた新疆のソ聯化が、十年後には實現したのである。

しかも、是等の鐵道とかその他の利權とかは、かつての東支鐵道と同様に先づ西北を、次で支那本土を共產化するための前提であるに過ぎないのだ。

四、ソ聯は果して日本と戦ふか

ソ聯は今何を劃策してゐるか

もし、長期戦が失敗すれば――

支那の企圖する長期戦は、色々の形態が考へられるが、その中でやゝ効果ありと思はれるものは、戦場荒廢の遊撃戦術である。敗戦々争の誘導である。退却に際して、日本軍に物を與へないとする、ナポレオンに對して取つたモスクワ戦術である。しかし、これは支那を擧げて廢墟に歸せしめるものである。街を焼き、田を潰し、畑を掘り返へさうとするものである。これは支那人の八割を占める農民を、あだかも上海に飢民を充満させてゐるやうに、餓死せしめるものである。遠征すれば日本軍も困るかも知れぬが、支那民衆が忽ちにして窮迫する。

共産派の狙ひは、實にこゝにあるのだ。窮死を眼前に見て、農民が自暴自棄となり、匪化するのを待つてゐるのだ。彼はこゝで共産宣傳の大旗を振らうといふのだ。南京政權が爆弾で四散し、支那の政治がこなくとび去つた壊滅の支那から、ソヴェートを掘り出さうといふのである。政治的權力乃至は、その支柱であるところの武力が、一度崩壊した後でなければ、性格を一變するやうな大革命はできがたい。ソ聯邦の支援によつて、支那

が假りに日本を打敗したとする。その場合南京政權は間もなく、共産派を無造作に叩き出して了ふであらう。その時改めて支那政府――今度こそ全資本主義國が支那の背後から援けるだらう――と戦ふよりは、支那を蕭條たる荒野原にして、そこからソヴェートを作り上げて行く方が樂だと思つてゐないだらうか。

だが、恐らく問題は、茲までは行くまい。たゞソ聯は、そこまで行つても尙望みがあることを、肚の底にしまひこんで事態を導いてゐると見なければならぬ。支那事變に對するソ聯劃策の重大性は、かゝるソ聯の立場なり、底意なりにあるといはねばならぬ。あの徹底的な革命をやり遂げたモスクワ指導者達である。軍備の強化に、あの徹底した五ヶ年計畫をやり遂げて來た連中である。支那事變が少しでも有利に（ソ聯に）轉換すると見ればどう出て來るか判らぬ。悪化すればするで何を仕出かすかわからぬ。

恐らく事態は、とことんまで行かぬ中に、南京政權が何等かの形で崩壊することになるであらう。何故ならば、杉山陸相の確言したごとく、長期戦に引込まれてむざ／＼ソ聯の手に乗ることは、極東平和に至重の事態を惹起するものであらう。従つて、日本としては

ソ聯は今何を劃策してゐるか

どんな事をしてもこの戦略を破碎しなければならぬ。さうして、この確言の中にはかゝる作戦指導の源泉を絶つことの、必要な場合もありうる事が含まれてゐるのである。

ソ聯が、上記のごとき戦慄すべき深謀から長期戦を指導してゐるとすれば、その責の一半は當然これを利用してゐる南京政權に歸すべきものであると同時に、他の一方はどうでもソ聯の負はねばならぬものである。

かゝる切迫した空氣の中に、ソ支不可侵條約が發表された。支那が泣きついた結果ではあるが、正しくソ聯畫策の一つの現はれである。不可侵條約それ自體は、消極的な意義しか持たぬが、それは明かに防共協定に對抗せんとするものであり、同時にその背後に密約の必在することを推斷しうるところに重大性がある。この條約が締結されてもされなくても、支那が武力援助を求め、ソ聯が援助をなすことの事實はすでに存在してはゐたのだが、おそらく今日以後、ソ聯は傳へられるがごとき大きな代償を得つゝ大規模な武器、及び場合に依つては兵員の供給を爲すであらうことを、一層明瞭にしたのだ。

しかしながら、極東支那はスペインとは大いに趣を異にする。南京政府の徹底的反省を

促さんがために、驟然起つた日本である。日支兩國國民の國交紛糾を醸し出すやうな一切の源泉をたたねば意義をなさぬ。スペインの如く、支那を戦争遊戯場と爲すことは斷じて許さぬ。ソ聯が何を畫策しようとする構はぬが、ソ支不可侵條約が現實に示すやうに、畫策が切實に日本死活の轉機に觸れて現はれてくることになれば、いやでもその責任の源泉に遡らねばならぬ。それはいふ迄もなく、日ソ開戦であり、そしてそれは直ちに世界大戦に續くものである。

ソ聯に、果してこゝまでの自信と決意ありや？

五、北支、上海戦に動くソ聯軍事

日支戦争の進展に伴つて、南京政府の背後にソ聯のシルエットが、次第に大きく映し出されて来るのを見る。ソ支不可侵條約の締結は、それを映し出した大きなランタンである。南京政府の内容について傳へられて来る變動も、そのランタンの一つであり、戦線

ソ聯は今何を劃策してゐるか

に現はれて来るソ聯色も、その決定的な一つである。

戦線へ現はれて来るソ聯色の第一は、いふまでもなく、ソ聯兵器の移入である。少くとも、開戦前契約のものは、獨りソ聯ばかりではなく、英、米、佛、獨、伊等々の諸國からの分も、開戦後香港を主として他の諸港へも運ばれて来た。ドイツ汽船は明かに引返へした。イタリアも手控への形である。然るに、ソ聯の兵器の輸入は、絶対に益々活潑になつて来た。南京、上海、香港、廣東等に到着した各種の兵器は、かなりな數に上つてゐると傳へられる。是等の數が眞實であるとすれば、第一線機三百餘機と計算されてゐて、その半ば以上を失つた支那空軍は、再び原型以上に返ることになる。パイロット——ブリアート蒙古人もあり、ロシア人もあるといはれる——が一所であるとすれば、いよく重大である。

第二は人員である。駐支大使館附のレーヴィン武官が、作戰に參畫してゐることも、當然考へられることである。今日では、南京政府の抗日政策、否全體の政治がコミンテルンといふか、ソ聯といふかに依つて動かされてゐるともいへるのであるから、その參畫する

のは當然である。參畫するとなると、兵術に於て優れてゐるであらうとは思はれる、ソ聯武官の指導するところとなる結果になるであらう。武官ばかりではない。推察し得るところでは、飛行機とそのパイロット、戦車とその指導員、大砲とその將校、是等がコミンテルンの指導員とともに入り込んで來つゝあるであらうことは明瞭である。スペインに於ける事實、ボロヂン、ガロンの昔に歴とした實證を残してゐる。況んや今日に於ては、何等他の國人の眼に觸れずして、自由に通交の出来る短い通路、トルクシブ鐵道と新疆とが存在してゐる。ソ聯飛行中尉が墜死した事實が傳へられてゐるのは、恐らく幾つかの例の一つではないかと思はれる。

第三に、これは氣のせいかも知れないが、上海戦線に於ても、北支戦線に於ても、ソ聯の匂ひを感じさせるものがあるやうだ。特に上海戦線に於ては、依然たる支那軍ではあるが、その頑強さの中には抗日意識と、支那軍自體の近代化との外に、或ものがあることを思はせるものがある。

これらの事實を語るに落ちてゐるのが、頻發したる日本海的不法行爲である。飛行機を

ソ聯は今何を劃策してゐるか

朝鮮の上まで飛ばせたり、我が漁船を拿捕したりしてゐる事實だ。他の國なら支那戰線以外で、寧ろチツとしてゐるだらうのに、支那のことは知らぬと言つた顔で、日本海北岸で小細工をやるのは、ソ聯の常套手段である。今に滿蘇國境でも何かやり出すであらう。だが、是が盛り上つて來たらどうなるか？

六、ソ聯の對日觀察の誤算

ソ聯が、支那へ送りつける器材指導員に續くものは、兵員でなければならぬ。此の論理の結論は、吾々は支那戰線でソ聯空軍、ソ聯機械部隊、ソ聯兵と戦ふといふことになる。滿ソ國境の偽裝騷擾が、先般の乾念子島事件にならぬと、誰が保障し得るか？。支那から飛來して來ても、それがソ聯重爆であり、ソ聯パイロットが乗組んでゐるとしたら、それは矢張り支那軍であらうか？。然も、それがさうならぬと、保證の出來ぬ觀察がある。

第一は、ソ聯對日觀察に誤算がある。在日共産黨員、或は在ソ日本黨員等の對日觀察が自然に半希望的觀察となる結果、日本國內の對立を我身に引較べて考へるのであらう。過度に激しいもの、様に觀察してゐる。日本が戦争を長引かせれば、忽ち共産黨が旗擧げでもして、それに靡くが如くに見てゐる。新聞にさう書き立てたり、アジ演説をやつたりして、大衆を樂しませてゐるモスクワ中央部の手であつて、實はそれ程とも考へてないのかも知れないが、現はれた事實はさうであり、又それを目標として、コミンテルンの活動も行はれてゐる。

第二は、日本の戦力に對する輕視だ。相手の式力を輕蔑することが最も危い。多くの敗戦は茲から來る。彼は機械力に於て優勢であると誘つてゐる。次に彼は數に於ても同様であると思つてゐる。次に過去に於ける彼等の缺點を充實補強し得たとしてゐる。もしそれトハチエフスキー元帥その他の赤軍陰謀事件に至つては、固より一の弱點を形成したものと觀じてゐるであらうが、それも比較的話であり、夫子自身は案外他國——ことに日本やドイツ——で人の疝氣を頭痛にやんでゐるほどには悲觀してゐない。むしろ永い眼から

ソ聯は今何を劃策してゐるか

見れば、赤軍の強化を確信してゐるものと考へられる。

七、ソ支不可侵條約の裏にあるもの

パリのル・ジュール紙の報ずるところによれば、ソ聯不可侵條約の背後には兵器、兵員の援助を目的とする軍事密約があるとされてゐる。かゝる軍事密約の存在は、固より肯定されるのであつて、内容も亦新聞紙の報ずる通りであらう。

併しながら、大局的な立場から見れば、ソ聯兩國の不可侵條約なり、軍事密約なりの存在の有無に拘らず、ソ支の對日協同戰線は、當然豫想せられるものであり、恐らく援助の實質においても變化はあるまい。換言すれば、これら條約によつて、はじめて援助を行ふものではなくして、從來かゝる關係のあつたものも、これによつて定式化したものに外ならない。

大體、ソ支の不可侵條約それ自體は、現下の狀態においては、なんら積極的な意義を有

せざるのみならず、笑ふべき存在である。不可侵といへば、第一に領土の不可侵を意味するものと考へられるが、ソ支兩國は、一體いかなる根據の上に立つて、これを締結したものであるか。周知の如く、外蒙古は十數年以前よりソ聯の庇護の下に獨立し、近年に至つては、新疆省も亦同様の過程を踏みつゝある。滿洲國の獨立を以て、日本の侵略とみなしてゐる支那が、西北邊疆に對するソ聯の、この種の行動を侵略とみなさぬ理由はない。従つて、ソ聯がこれら邊疆より一切の勢力を撤退して、支那主權の復歸を公表實行しないかぎり、ソ支不可侵條約の締結は、支那にとつて、ソ聯侵略の成果を確認するものといふより外はないのである。

従つて、ソ支不可侵條約は、目下のところ、對日いやがらせの精神的効果を有するにすぎず、しかも、この目的を達するために、支那は實に莫大な實質的損害を甘受したことゝなる。南京政府がいかに血迷つたとしても、かゝる犠牲に甘んじて、僅かな精神的効果を期待するわけがない。畢竟、背後における軍事密約の存在は必然であり、その代償として不可侵條約を締結したものであらねばならぬ。

ソ聯は今何を劃策してゐるか

ソ聯としては、これによつて表面あくまで、日本の敵として立つことなく、暗に、いみをきかしうるのみならず、將來のソ支關係に重大な足掛りをうることになる。
ソ支不可侵條約は、敗戦後の支那に對する重大なる發言權留保の伏線にすぎない。
この伏線なるが故に、ソ聯は支那の敗戦を覺悟で援助を行ひ、しかも援助を餌に、不可侵條約を以て、その「侵略の成果」を確認せしめたのである。

八、ソ聯の對支援助は日ソ戦の小手調べ

然らば、ソ聯は一體いかなる援助を支那に行ふか。

まづ第一は、新聞紙の報ずる軍事的援助である。これは將來——その遠近はしばらく措き——必ず起るべき、日ソ戦の小手調べである。支那軍の敗退が決定的となれば、前にも云つたやうに、支那の名の下に、ソ聯の兵器と兵員とが、ソ聯の將軍の指揮下に作戦するといふ事態が、生じないとは斷言できない。否、徴表はすでに生じつゝある。補充の形式

をとつて、ソ聯の資材が逐次増加すれば、恐らく近い將來に、かうした變態が實現するであらう、これはソ聯赤軍にとつて、假想敵の強弱を、テストすべき絶好の機會である。そしてあはよくば、なんらかの口實を設けて、對日宣戰布告を行ふことは、ソ聯の最も賢明なりとする手段といはねばならぬ。

第二には、これに附隨する政治的・經濟的援助がある。資金の供給もあらう、物資の輸出もあらう、陝西、甘肅など西北支那の一部においては、ソ聯特務機關がすでに農民に資金をばらまいて、共産黨及び赤軍勢力の急激膨脹に躍起となつてゐると傳へられる。平時ならば南京政府に對する抗敵行爲が、そのまゝ救國手段として歡迎されてゐるのは、大なる皮肉でもあり、支那民衆にとつては悼むべきことであらう。

かうした軍事的・政治的・經濟的の援助はいふまでもなく、支那の長期抗日戦を可能ならしめるために外ならない。支那が大なる精神的・物質的打撃を豫想して、日本の意思に屈伏することの早ければ早だけ、極東に對するソ聯の野心は、その進出を阻まれる。一日も長く抗戦せしめる、それは戦争の慘禍をできるだけ大きくする事である。恐らく支那

ソ聯は今何を劃策してゐるか

は七花八裂にして、荒廢その極に達するであらう。ソ聯は自己の革命戰の經驗によつて、中途半端なつぎたしや、手緩い改革が眞の革命を不能ならしめるには、まづ既存の凡ゆる政治的・經濟的な構成物を徹底的にぶちこはしておかねばならぬ。新しい建設は、焦土のうちより起る。——だから、ソ聯は支那を徹底的な焦土と化さうとしてゐるのだ。荒廢は甚しいほどよい。それには支那の對日戰意を、過早に萎縮せしめてはならない。一日續けば一日だけ、支那の荒廢化は進行する。これが長期抗戰をけしかけるソ聯の眞意だ。それに都合のよいことには、過去數年に亘る不屈の宣傳煽動が、やうやくこの事實を結んで、支那を指導する知識層の大部分は、長期抗日戰爭論に動員されて、長期抗戰論者はすなはち愛國者であり、然らざるものは、漢奸のレッテルで張られてしまつた、風潮ほど恐ろしいものはない。よしかゝる見透しがついても、公然漢奸と指彈されることの恐怖から、敢へて反對するものもない。いはんや、無智文盲の大衆においておやである。かくて滔々たる長期抗日戰爭の風潮は、支那社會の上下に横流するに至つてゐる。

この風潮は、ますます盛り立てる必要がある。ソ聯が支那の味方に立つといふことの精

神的激勵が一つ、これに兵器・兵員の融通を行つてするところの物質的援助が二つ、長期抗戰のスローガンは斯してますます高く、支那國土の荒廢はいよゝゝ甚大となるのだ。

しかも、この長期抗戰決行には、一つの副産物がある。當然その負擔は、日本においても加速度的に増大する。そして、ハマダンをはじめ、その他のソ聯論者が見透してゐるところによれば、このことは日本の内部的危機を深化させる。萬一このことがソ聯側の誤算であつても、これによつて日本の戦力——すなはち、この場合には國力の消耗は不可避であらうといふのだ。だから、ソ聯としては長期抗戰によつて、日本の國力をも可及的に損傷することを目論んでゐる。勿論、老獪なロシアは、こんなことは色にも出してゐない。

そして支那を指導する「愛國者」の「守護神」となつてゐる。従つて、ソ聯にとつては、抗戰がいよゝゝ長く、日支兩戰國——殊に支那の荒廢がますます甚しければ、目的を達したのであつて、支那の勝敗の如きは、敢へて深く關心を有するところではない。こんなことは想像もできないけれども、かりに支那が勝てばどうか、そのときは中央政府自體が、完全にコミンテルンに把握されてしまつてゐる。

ソ聯は今何を劃策してゐるか

併し、ソ聯においても、支那の勝利を公算の内に入れてゐるものは、まづあるまい。支那が負ければどうなる、これはソ聯の最も歓迎するところだ。支那は敗戦する。南京政府は倒壊する。そしてその後に来るものは、膨大な支那の七花八裂の崩壊分裂である。日本が勝利を得てのちに、かりに支那領土の保全統一を希望したところで、コミンテルンの策動によつて、支那の分裂は免れない。共産地区はすでに設立され、その場合の足掛りはもうでき上つた。あとは敗残の責を蔣介石一派に負はせて、足掛りを基礎として、これを擴大すればよいのだ。支那はこのとき、すでに焦土になつてゐる。そして恐らくは——とかれらは胸算用をしてゐる——勝つた日本も、勝ちに乗じて、これを叩きつぶしにはやつて來られないであらうと。

かくてソ聯——すなはちコミンテルンにとつては、日支の抗争は千載一遇の絶好のチャンスである。須らく、惨禍はできうるかぎり、大なるべし——こゝにソ聯の對支援助の狙ひがあり、眞意があるのだ。

九、ソ聯が日本と戦ふ時

ソ聯は、今たゞちに公然たる日本の敵手として、登場することはまづあるまい。公然たる登場といふのは、ソ聯の名において、日本と戦争することだ。だがこれも、日支全面戦において、日本の国力の疲弊が意外に大きければ、その時は別問題である。ソ聯は勿論日本の存在を、肯定してはゐないのだから。最少の犠牲を以て、これを屈服せしめようと判断すれば、その判断の時機が、日ソ戦争勃發の時機である。だが「戦はずして勝つ」とは、孫子の言葉を俟つまでもなく願はしい。ソ聯はそれを狙つてゐる。これが對支援助となり、支那の長期抗戦となつて、現はれたことは前述の如くで、しかも「他の條件にして均しきかぎり」、この狙ひは全然誤れりとはいはれない。ソ聯は今、日本を公然の敵手とする愚策をさけて、支那が勝つも負けるも、何れにせよ損のない相撲をとつてゐる。このことは、ソ支不可侵條約の有無に拘らず、また今更改まつた軍事密約の有無に拘ら

ソ聯は今何を劃策してゐるか

ず、當然に豫想されることあり、そしてたまく、これら條約の締結といふ外交的チ
エスチュアによつて、確認されるものに外ならない。

ソ聯の對日戰備の前面に、支那が役割を買つて出て、ソ聯のために日本の戰鬪力の減殺
をはかる、支那としては勝敗何れにせよ、救ふべからざる奈落への運命を、今次の條約に
よつて約束されたものといひうるであらう。

苟安を求むる支那人の民族性は、こゝにも現れてゐる。支那の舊式軍隊においては、平
時には極めて脱走兵が多いが、戰鬪開始となると反對にこれが少くなる。戰時の脱走は、
必ず銃殺されるからである。もちろん一方戰死の公算も決して少くはない。併し戰死する
のは少くとも明日、明後日のことであり、それも運よく免れるかも知れず、免れれば「洗
城」掠奪の幸運にありつくことができる。一寸延しは、由來かれらの通有性であるのだ。
以夷制夷の政策も、この現れに外ならない。

ソ聯の對支援助は、今までのところ幸先よく(?) スタートを切つた。今後局面の推移
につれ、ことに支那の敗退が顯著となればなるほど、ますます積極的に露骨となるであら

う。

しかし、日本の正面敵對を恐れて、損のない相撲を取らうとしたソ聯の賢策には、唯一
の誤算があつた。支那の假面にかくれてゐるかぎり、日本は手も足も出しようがないとい
ふ見透しがこれである。

日本が日支紛争の進展につれて、從來の不擴大主義を放棄して、徹底的膺懲の決意を表
明した以上、全力を擧げてこれに邁進する。この行動を阻害するものは、當然われに對す
る敵對行動とみとめざるを得ない。ソ聯の對支援助も、これが止め度もなく積極化すると
きは——やはりこれを問題として、取り上げざるを得まい。東洋の平和は一日も早く確立
されねばならぬ。そしてその目的を達成するためには、支那の對日抗戰を根源的に艾除す
べきだ。支那の對日抗戰を誘導するあらゆる根源は、拔本塞源的に艾除される。よし禍根
がソ聯にあつても、論理に二はない。だから、支那の抗日戰線——それは硝煙こもる文字
通りの意味で戰線となつた——を煽ぎ立てるソ聯の對支援助が度を越した場合は、ソ聯は
日ソ戦争の登音が、戸口に訪れたことを覺悟しなければならぬのである。これは日本の
ソ聯は今何を劃策してゐるか

ためばかりではなく、支那の四億民衆のためである。
 かうした日本の決意を知つてか知らずか、ソ聯の對支援助は日一日と露骨になつて行くやうである。

——(九、一二)——

第百書房だより

◇北支、上海戦に於ける皇軍は壓倒的勝利を獲ち得、日本は不擴大より徹底的膺懲へて進展したが、この日支戦の背後にソ聯は盛んに、對支援助を目論んで畫策支那を動かしつつある。このソ聯の眞意は奈邊にあるか？そして、ソ聯は如何なる對支援助を行ひ、又如何なるソ支共同戦線を廻らさうとするか？吾々の最も重意して見守らねばならないのはソ聯の態度である。軍事評論家として、令名ある三島康夫氏をわづらはして、この點を解明して載きました。

◇本書房パンフレットは、毎月二點以上發行、全國驛賣店、ホームスタンド、街頭スタンド、有名書店にて發賣して居ります。表紙上部に必ず「第百書房發行」の文字が入れてありますから御注意下さい。店頭に品切れの節は直接發行所に定價に送料を加算して御申込み下さい。

◇パンフレット出版界は、今後一層著者に權位があり、内容充實のものが重要せらる事は當然にて、唯題名だけで賣らうとするパンフレットは、極度に消滅して行かなければなりません。

◇『讀切小説』十一月號がスバラシイ内容で、スバラシイ賣行を示して居ります。早くお求めにならないと品切れになります。

ソ聯は今何を劃策してゐるか

定價 十錢 (送料三錢)

昭和十二年十月十五日印刷
 昭和十二年十月十八日發行

著者 三島 康夫

發行兼印刷人 伊藤 稔
東京市芝區田村町四ノ十八番地

印刷所 須田町印刷所
東京市神田區須田町二ノ三番地

發行所 第百書房
東京市芝區田村町四ノ十八番地

電話芝(43)三〇〇七番
 振替東京九〇七七番

東京鐵道局公認 鐵道保養會 (鐵道各線ホ1ム)
スタンプ一手買)
 鐵道弘濟會新聞部

次取大
 川頭春陽堂、富田報英堂、啓徳社
 新正堂(京阪神一手扱)
 川瀬書店、南進堂(名古屋)
 菊竹金文堂(九州)
 大坪傳信堂(福岡)

(錢十各價定) 錢三料送 録目書行刊房書百第

乾信一郎著	坂川辰馬編	東條貫太郎著	安藤盛著	東京毎夕新聞編輯局編	相住桐郎著	森 轟 昶著	東京毎夕新聞編輯局編	中村正常著	濱本浩著	辰野九紫著
二・二六事件の惑星 北一輝と西田税	二・二六事件断罪記録	スバイ禍の日本	セレベス島女風景	惚れられた話	徳田榮子の手記	私の事業哲學	女の日記	歳末遺線譚	戀の決死隊	萬引一代女
中江 享著	松本忠雄著	松本忠雄著	來間 恭著	上田健三著	内田健次郎著	太田宇之助著	静木恒夫著	青山謙介著	宇佐美 謙著	大平進一著
英國前皇帝と シンブソン夫人	支那の抗日人民戦線	宿命に立つ日支關係	宇垣一成と近衛文麿	國鐵疑獄の全貌	久原房之助と 石原廣一郎	新支那を説く	小林一三と 大谷竹次郎	文部大臣平生飢三郎 とはどんな男か	東京オリムピック 大會を目指す金儲け	戦争はいづつか

(錢十各價定) 錢三料送 録目書行刊房書百第

伊達圭介著	栗林正修著	唐島基智三著	菅原節雄著	伊佐秀雄著	報知新聞社編	大辻司郎著	柳家金語樓著	村田孜郎著	柳家金語樓著	松本忠雄著
選挙に於ける 軍部と政黨	金儲けはこゝ二三年	軍部・池田・結城のコンビは 何を物語るか?	宇垣より林へ	林 銑 十郎	議會主義か フアツシヨか	新作漫談	續新作落語	綏遠問題の真相	新作落語	中國共產黨の活躍
三島康夫著	楠 波 一著	川田三郎著	井關孝雄著	石山賢吉著	潮 哲 哉著	山内藤介著	唐島基智三著	井尻百步著	木本龍太郎著	木本龍太郎著
ソ聯は今何を 劃策してゐるか	厩舎から穴馬を 訊出す法	戦争と株式投資	金の作り方・儲け方	金持になるコツ 出世するコツ	『ひとのみち教』は 財産をどうするか	近衛内閣の頭腦を衝く	林の退陣と 近衛内閣出現の真相	近衛内閣と 經濟界の前途	生産力擴大下の 投資對策	準戦時下の株式投資

▼御注文は

すべて前金にて本社直接に願ひます。代金は振替貯金又は三錢郵便切手にて定價に送料を添へて御申込下さい。

月刊 讀切小説

十一月號が出た

またく、秋涼十一月號にふさはしい内容で、讀切傑作小説揃ひの雑誌が出た。こんな面白く安くて、手輕な雑誌はない。すぐ店頭で御求め下さい。

内	容
探偵小説	蝸牛の足
女股旅	秋晴れ正丸峠
讀切講談	情の首實驗
	木々高太郎
	平山 蘆江
	神田 ろ山

全國驛賣店書店にて發賣中、品切れの節は直接本書房へ御注文下さい。

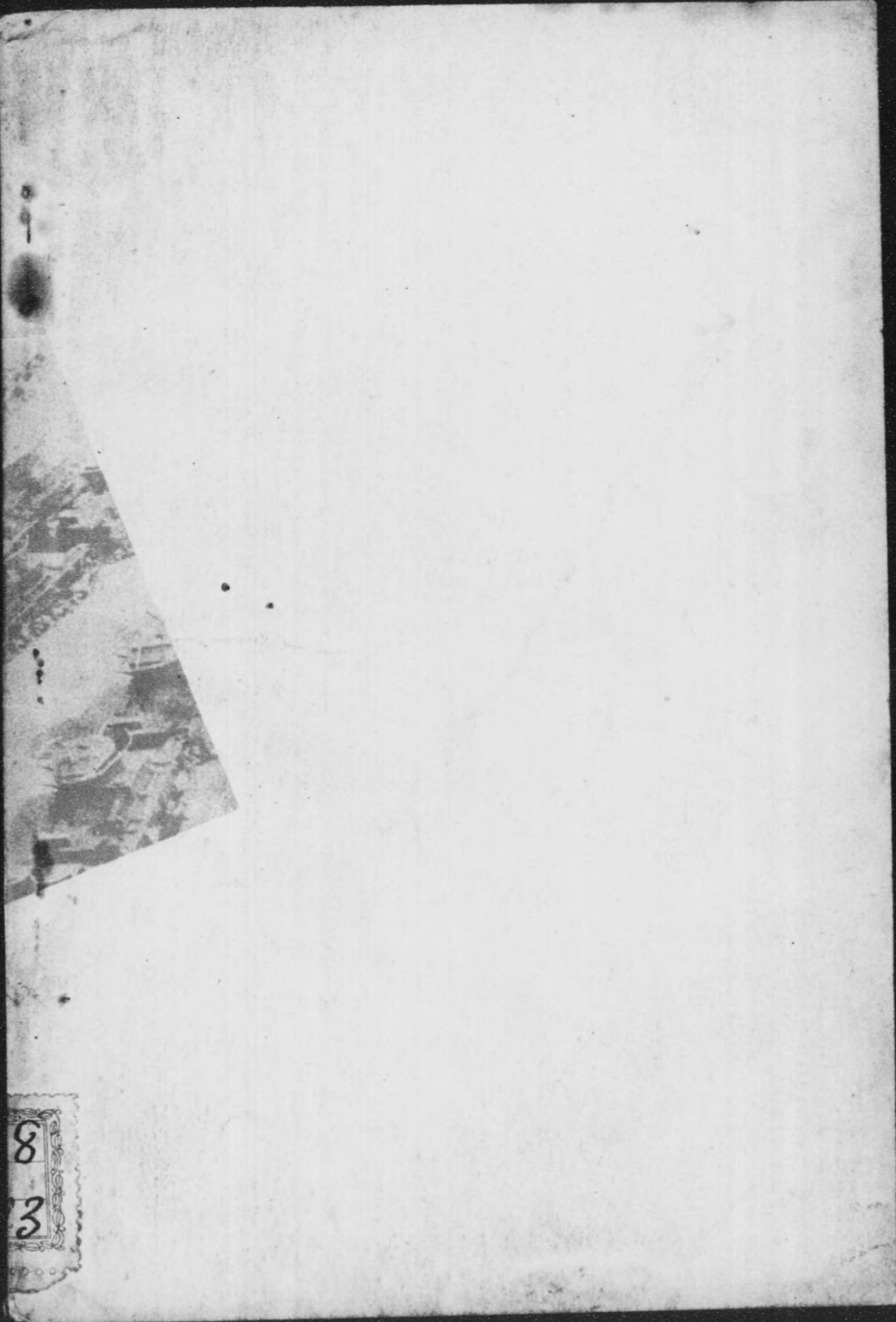
定價十錢 (送料) (半年六錢) (一年一圓二十錢)

發行所

東京市芝區
田村町四丁目

第百書房

振替東京九〇七七番



8
3